

P-21

卵巣予備能低下症例に対する同一周期 2 回採卵 (Duo Stim) の有用性の検討

1)勝 佳奈子

1)中村 春樹 1)松岡 麻理,1)太田 志代,1)北山 利江,1)門上 大祐,1)山内 博子 1)中岡 義晴

2)森本 義晴

1)IVF なんばクリニック 2)HORAC グランフロント大阪クリニック

【目的】 卵巣予備能低下症例の ART 治療は、1 回の採卵で獲得できる卵子数は少なく、数周期にわたり複数回採卵を実施している症例も多い。このような卵巣予備能低下症例に対して、同一周期に 2 回卵巣刺激および採卵をおこなう Double Stimulation (Duo Stim) を実施し、その有用性を検討した。

【方法】 2019 年 10 月から 2020 年 4 月までの期間で、卵巣予備能低下症例で低刺激もしくは完全自然周期での採卵を予定されている患者に対して Duo Stim による卵巣刺激を提案し、治療についての同意を得られた 52 名に対して実施した。卵胞期・黄体期で 1 周期とカウントし、52 名 58 周期 (5 名で複数周期実施あり) について後方視的に検討した。

【結果】 52 名の平均年齢は  $40.3 \pm 3.4$  歳、AMH 値は  $1.32 \pm 1.4$  ng/ml であった。58 周期のうち、卵胞期で 5 例、黄体期で 17 例が採卵中止となった。卵胞期・黄体期ともに採卵まで至った症例は 40 周期 (68.9%) で、発育卵胞数・採卵数は黄体期で有意に多かったが、卵子成熟率や受精率は両群で差は認めなかった。卵胞期で 10 例、黄体期で 8 例成熟卵子の獲得に至らなかったものの、40 周期のうち 26 周期 (65.0%) で Duo Stim により 1 周期 1 回採卵と同等かそれ以上の卵子・胚の獲得に至った。

【結論】 Duo Stim は卵巣予備能低下症例の ART 治療において、その成績を向上し Time-To-Live Birth を短縮するための有益な選択肢の一つになると考えられた。